

私の比島戦記

京都府 山野 益一

昭和十七（一九四二）年一月二十五日、我々の所属していた小林中隊は、裏キナウ湾の岬付近に上陸して、敵の大軍と日ごと夜ごと、激戦に激戦を展開している恒広大隊に対して『弾薬・糧秣の輸送並びに増援をすべし』との命令をうけた。

我々はいよいよ最前線で敵と戦火を交えることのできる喜びに、血湧き肉踊るの感を覚えながら出発の準備を完了した。

出発に当たり中隊長は我々全員を集めて、今度の作戦の目的について説明をすると共に「我々の

敵の攻撃が開始された。

我々はすでに敵前三百メートル付近まで接近していたのである。敵の攻撃と同時に中隊長は、全員に対して飛び込み準備の命令を出した。いよいよ敵前上陸である。

この時、異様なもの音がして我々の乗っている舟艇が突然黒煙を吹きはじめた。見ると機関部をやられた模様である。しかしながら舟は真一文字に敵前に進んで行く。この時、中隊長はすでに上陸準備中の猪飼小隊、桜井小隊に対して、速やかに敵前上陸を敢行すべしとの命令を出された。

敵の攻撃は、ますますその激しさを加え、我々の舟の中でも早や敵弾に倒れてゆく戦友があちこちに見られるようになった。我々は倒れた戦友をしっかりと手に抱いて、仇は必ず撃ってやる……と、敵を睨みながら中隊長の飛び込み命令を待った。

この間、時間にすればわずかであったかも知れないが、中隊長の命令の待ち遠しかった……。

身体はもとより国に捧げた身体である。たとえこの身が南国の山野に屍として果てるとも、日本軍人として恥ずることのない立派な行動をとってほしい」との訓話をされた。その瞬間、脳裏に閃いたものは懐かしい郷里の姿であったが、それも束の間、出発準備の号令によって打ち消されていた。

そして一月二十六日二十三時、いよいよ出発のときが来た。

我々は、完全武装をし三隻の舟艇に分乗して、暗夜の海を進んで行った。目的地はキナウ湾の南方に敵前上陸することである。時計は一月二十七日の午前三時を指していた。丁度このとき、今まで静かであった海岸線から一斉に銃声が聞こえ、

命令と同時に我々は、一斉に海に飛び込んだ。

今にして思えば海の深さは約七尺余りもあつたであろうか、自分は夢中で泳いだ。いや泳いだと言うよりむしろ歩いたと言った方が妥当かもしれなかった。それは身体に弾と手榴弾と小銃をつけていたからである。

海で育った自分は泳ぎにはかなりの自信を持っていた。しかしこの時ばかりは浮き上がることができず、かなりの海水を飲んだ。そしてとにかく無我夢中で波打ち際に上がった。上陸地点は砂浜の続いた入江になっていたが、岬は絶壁になっていた。簡単には上がれそうにもない。

我々は藤蔓を命の綱として絶壁に挑んでいった。敵はこれ幸いと岬の上から乱射をあげて来る。不幸にして敵弾に当り途中から転げ落ちる戦友に、心の中で詫びを言いながら、いかんともしがたく心を鬼にして、岬の上に登っていった。

丘に上がるやいなや匍匐して敵陣に接近していった。しばらくして敵は入江に上陸した小隊のた

めに退却したとみえて、銃声が止んだ。敵の退却した後に、水冷式の機関銃が置き去りにされており、この頃になってようやく人の顔が見分けられるようになって来た。

早速中隊長は、各小隊長を集めて攻撃目標を指示した。その内容は「第一小隊は右海岸線一帯を、第二小隊は左入江付近一帯を、第三小隊は前面の敵を攻撃せよ。ただし敵の意図が判明せんので深追いは絶対禁ずる」と言うことであつた。

夜が明けてくるにつれて、我々は仮陣地の構築に取りかかった。それと同時に輸送して来た弾薬・糧秣等の運搬を開始したが、ほとんどが水びたしになっていて運搬は全く困難をきわめた。けれども我々の上陸地点と恒広部隊との距離が余りにも離れていたがために部隊との連絡がつくまで弾薬・糧秣を大切にしなければならぬと言ふことで、これが保管管理に万全の努力をつくした。

そして中隊長は一刻も早く我々と恒広部隊との連絡をとらなければならない任務があるので、第一より戦車三台と従伴歩兵二個分隊（数未定）で攻撃を開始して来た。これに対して野木准尉は、肉弾攻撃の作戦を立てられたのである。敵の戦車は大樹木の根本に戦車砲を撃ち込み、その大木を倒しながら刻々と我が小隊に接近して来た。これに対して、すでに準備されていた我等が肉弾攻撃班は直ちに准尉の命を受け迎撃を開始した。すなわち我等が戦友は両腕に爆雷をしっかりとかかえ、敵の戦車に一メートル近くまで接近して、その爆雷を戦車めがけて投げ込むのである。

一発、二発戦友は身命を賭して爆雷を投げ込んだ。しかしながら敵の戦車はビクともしない。なおも戦友は二発、三発と重ねて爆雷を投げ込んだ。けれども敵の戦車のカタピラーを切る事ができず、戦車は刻一刻と我が陣地に接近して来た。

五十メートル近くまで差し掛かったとき、我が小隊は最後の手段として、大隊砲の水平射撃をも

一小隊をもつてこれが連絡のため出発を命ぜられたのである。

しかしながらいったんは退却した敵は、再び猛反撃を開始して来た。そのために第一小隊は前に進むことができず、止むを得ず後方の仮陣地まで引き返して来た。そこで我々は、第一、第二、第三の各小隊に分かれて陣地を確保し、敵の攻撃に備えたのである。

島全体は深いジャングルに覆われ、道は四方、八方にあつたが、道以外は鳶等のために全然通れなかつた。

敵は第二小隊の前面である海岸線に主力を集めて攻撃を開始して来た。我々もここには大切な弾薬・糧秣が集積してあるために、全力をあげて応戦につとめた。敵はこの地帯が小さい森林であることや、かつては彼等の演習地であつたために、地形には非常に詳しく、一番有利なところから攻撃を開始して来た。

一方、第二、第三小隊の前面の敵も猛烈な反撃つて先頭の戦車を攻撃した。それによつて敵の戦車は一瞬前進を止めた……。さあいまだと待ち構えていた肉攻班の一人が勇敢にも戦車によじ登りハッチを開いて手榴弾を投げ込んだ。さすがの敵戦車もこれにはまいつたとみえて擱座してしまつた。

これを見た残りの敵戦車はあわてふためいて退却し、我々はやつとの思いで顔を見合わせ、無事を喜びつつその日を終わったのである。

その後も敵との激戦は続けられた。そして弾薬・糧秣は日ごとに乏しくなり、最初は乾パン一袋の支給があつたが、しまいに一袋のパンを二人、三人で分け合うようになった。

そして二月五日、木村大隊長の指揮する三個中隊が救援のため夜間上陸をすると共に、敵の反撃はますますその激しさを加えて来た。大隊長は第三小隊に前進を命じた。しかしながら敵の戦力は友軍よりすぐれていたため反撃は失敗に終つてしまつた。そしてこの戦いで野木小隊長は目を負傷

され後日後方に下られた。

夜明けと共に、三カ所に分かれていた小隊は第三小隊の陣地に集結した。そして第二小隊の陣地は公手隊と第一小隊の陣地は西岡隊並びに三木隊とそれぞれ交替をした。木村隊長は、恒広大隊との連絡をとるべく西岡隊を主力として攻撃に移った。そしてそのまま大隊との連絡は絶えてしまった。

一方、小林隊の前面に敵の戦車の大軍が従伴歩兵を伴い猛烈なる攻撃を開始して来た。これに対して我々は、戦車に対する攻撃策は全くなく、中隊長は逐次後方撤退を命じた。しかしながら我々は命令を拒み、突進して来る敵の戦車に突撃して行ったが戦車の蹂躪に会い、中隊長以下左右第一線を除いたほか、全員戦死をしてしまった。

この激戦はわずかに一時間余りであった。勝利を収めた敵はわずかに監視員を残して後退して行った。その後我等は機を見て左右より突撃してこれを奪還してしまった。この時中隊の主力は吉

い戦友と別れを告げ、再び第三中隊長三木隊長に会って、師団司令部に帰る旨を報告した。中隊長は「無事成功を祈る」と心から励ましてくれた。地図の上で調べたところによると、真直に泳いでも約四里の海面である。果して無事に目的を達することができるかだろうか。いやいかなることがあろうとも、この任務だけは必ず果たさなければならぬと自問自答しながら心静かに陽の落ちるのを待った。

やがて陽も落ち、薄暮が近づいて来た。自分は二人の兵に対して次の注意を与えた。「誰が攻撃されても、そのままにしておき友軍との連絡を重視すべし」と、そしてお互いの成功を祈りつつ静かに海に入っていたのである。

我々は、もの一つ言わず暗夜の海をカナス岬を後にして、一路友軍陣地であるバガツクをめざして泳いだ。

しばらくして我々は、潮流の激しさに耐えかねて、一時休憩の場所をもとめるべく海岸に向かっ

岡軍曹以下十二三人であった。それから間もなく公手隊より速石一等兵が連絡に来て「水泳で師団司令部に報告に帰るもの、速やかに公手隊に行き、隊長の指揮を待つべし」とのことであった。

畑中曹長はまだ大隊本部より帰還しておらず、代わって吉岡軍曹が坂本（小生の旧姓）、林石、小西の三人は師団司令部に帰るよう命令された。直ちに我々は、離ればなれになって公手隊長のところへ出発して行った。

公手隊の陣地に着いて見たら、すでに林石、小西上等兵は先着していた。自分が着くと直ちに公手隊長は小林隊の状況について詳しく聞かれた。状況報告の後、公手隊長の命により連絡文をゴム製の袋と竹筒の中に入れてしっかりと身につけた。なお、口頭連絡としては、次の様な命令を受けた。

- 一、速やかに連射砲及び対戦車砲を送られたし
- 一、我が大隊は後三日以内で激滅するやも知れ

ず

命令を受けた後、自分は中隊に帰り、残り少な

で泳いだ。すると間もなく、海岸にたどり着く寸前、にわかには敵機動船のエンジンの音がした。驚いて自分は再び沖に向かって泳いだ。敵との間十メートル余、この時既に他の戦友とは離れ離れになり、一人で夜の海を泳いだ。船はますます自分に近づいて来るように思われ、話声も一段と高く聞こえて来た。自分は無我夢中で目的地の方向に泳ぎに泳いだ。

やがて敵の舟も遠のき、ある岬を越したとき、パツと目に入ったのがサーチライトの光であった。自分は「しまった、もはやこれまで」と思ったが、ふと脳裏に浮んだのが灯台下暗しという諺であった。早速身につけていた救命具は全部捨てて素裸の背中に剣身だけをつけて泳いだ。自分はここがいか八かの大勝負と思ひ、こうこうと照るサーチライトの中を大胆にも漂流物の様に海岸をめざして横切っていったのである。幸い敵の目に付くことなく……こうして、それから何時間か泳ぎ続けた。そしてこの頃になって自分の身体の自由が少しづ

つ失われてゆくのを覚えはじめた。

しばらくして再びある岬にさしかかった。すると前のようにサーチライトが海面を無気味に照らしていた。しかし一度体験をしているので自信があった。けれども身体はものすごく疲れていたが使命の重大さを思い起こして、全身の精神を集中し、渾身の力を出して泳ぎ抜いた。サーチライトの照射線から逃れた自分は、一度に安心をして身体から総べてのものが、もぎ取られて、ただ気力だけで泳いでいるように思われた。

それから何時間泳いだのであろうか、次第に海面が明るくなり、陸地の山々がほのかに見えはじめた。同時に陸地との距離も大体判断出来るようになった。自分が泳いでいる所から陸地まで約五、六百メートルかと思われた。陣地はもう直ぐそこだと自分で自分に言い聞かせながら一生懸命に陸地に向かって泳いだ。その頃自分の喉は塩水を飲み、それが干からびて焼けるように痛かった。そして、どのようにして泳いでいたのか全く記憶

に日本人だなと感じた。その時の嬉しさは、とても筆舌には表すことが出来ない。

自分は、力ない声でその兵を呼んだ。そして自分の任務を伝え、中隊長殿に会わせてほしいと頼んだ。兵は直ぐに血相を変えて走って知らせに行った。するとすぐさま中隊長以下幹部が自分を迎えて来てくれた。そして中隊長は自分の手をしっかりとにぎり「良くやった。良くやってくれた」と励ましてくれた。

自分が出ない声をふりしぼって「自分は第二十連隊第一大隊の兵隊であります。今、カナス岬に上陸している友軍の状況を師団司令部に連絡するために来たものです。速やかに司令部へ連れて行って下さい」とたのんだ。

「なお、カナス岬を出たのは自分以下あと二人います。その兵達がいっ海岸に着くかも知れませんがよろしくたのみます」とつけ加えた。

中隊長は身につけていたゴム製の袋から連絡文を取り出して、目読をはじめた。そして読み終る

がないが、とにかく死の一步手前まで来ていたことは間違いないと思われた。

やがて珊瑚礁の海岸を這うように上がった。そして岩の間に溜っていた雨水を探し求めた。ようやくに見つけた水の中にはボウフラがわいていた。そんなことには目もくれず一息で飲んだ。それから再び這いながら友軍の基地を探し求めた。その時の自分の頭の中には、ただ使命のことだけしかなく、今考えて見ても自分がいかに使命に生きた人間であったかと言うことが、心の底から誇れるように思う。したがって自分は陸地に着いても気を失うことなく、さらに珊瑚礁の岩を五百メートル余り銃声をたよりに進んで行った。

すると岩陰に一人の裸の人間を見つけた。心の中で警戒しながら三百、二百と近づいて行った。だが疲労のため視力が衰えて敵か味方か区別がつかなかった。さらに接近して木陰に寄りながら相手の動作を見守った。しばらくしてうすぼんやりと顔形もわかりだした。その顔形から見て直感的

と同時に直ぐさま自分を自動車に乗せ、師団司令部へと向かった。司令部へ到着すると直ぐに森岡中将に面会させられ連絡文を手渡すと共に口頭連絡事項を報告した。

一、速射砲を速やかに送って頂きたい

一、一大隊は二月十一日紀元節を期して総攻撃を開始します。なお大隊の戦況は連絡文に書いてあります。

これだけの連絡を言うのに本当に一生懸命であった。

報告が終ると自分は直ちに別室に案内され休憩をさせられた。同時に緊張の連続であった重い任務から解放されたと言う安心感が一度に溢き出して、かなりの長い時間、死んだ様に眠っていたようである。

これはその後になつてわかったことであるが、自分が眠っている間に司令部では直ちに対策会議が行われ、飛行機でピラを撤くことが決議されたようである。その内容は『任務達成せり、速やか

に撤退すべし』と仰うことであつたらしい。

そして、その夜、舟艇でカナス岬に友軍を迎えに行つたが失敗に終つたようである。

そして後日、参謀は兵力を増強するため日本へ歸られた。自分は、体力を回復させるため、毎日アフターケアに努めた。

木村大隊の中での生存者は自分と小西一等兵の二人だけかと思つていたが後になってまだ十一人余り生存していたことがわかつた。

そして数日後、その生存者と共にジャングル内に善戦を続けている連隊長のもとへ復歸したのであるが、そのときの木村大隊の兵力は自分以下十三人となつていた。

自分は後日、第二次バターン作戦に参加し敵の降伏後、カナス岬に戦友の遺骨収集に二週間余り行つたが、当時のことを思い出し、いかに我々が戦つたこの戦場が、我が軍にとつて重要な陣地であつたかと言ふことを、今更ながらよく認識したものである。

【解 説】

体験記執筆者は歩兵第二十連隊（垣第六五五部隊）第一大隊に属する。連隊は第十六師団に属し、福知山編成の部隊である。部隊長は吉岡頼勝大佐であつた。

本来、南方軍—第十四方面軍— 第三十五軍の戦闘序列で、第三十五軍は第十六、第三十、第百、第百二師団、独混第五十四、第五十五旅団などを隷下にレイテ島に散開した部隊である。

第十四方面軍は、昭和十七年一月二日、マニラの攻略が終わると、敵主力のバターン半島方面への退却に乗じて隷下部隊を編成して、これを撃滅する企図を以て、同日新たにバターン半島に対する進撃を準備した。

当時軍は、バターン半島の敵陣地の強度に関する判断を誤り、地形に関する認識も全くなく、敗退する敵に追尾して突破しようものと考えていた。ただコレヒドール要塞は、攻略困難な場合も想定していた。

軍は戦闘司令所をサンフェルナンドに進め、十三日、在マニラの第十六師団より、歩兵団長が指揮する歩兵第二十連隊基幹（第二大隊）の部隊を呼び入れ、これを木村支隊とした。体験記筆者の所属する部隊である。

この木村部隊は、十五日夜サンフェルナンドに到着、以後モロン、モウパンを撃破、二十五日にはバガックに進出した。これより先、支隊は、支隊主力の戦闘を容易ならしめるため、二十二日夜、恒広大隊をマヤカオ岬において乗艇させ、海路カイボ岬に派遣した。

しかし恒広大隊は上陸地点を誤認して二十三日未明キナウ湾の岬に上陸し、敵の優勢なる攻撃を受け、その重囲に陥つたという。

ここに執筆者の言う恒広大隊に対する「爆薬・糧秣の輸送並びに増援をすべし」の命令を受けた活動が行われた。

木村支隊左翼隊は善戦敢闘し、一月二十九日、敵陣地に突入し、三十一日以来糧食・弾薬が欠乏

し、空中よりの補給も果たさず、馬肉を喰い樹脂を啜つて敢闘したと言われている。

二月九日、敵陣後端に進出した時、反転の命令を受けた。攻撃方法を最考慮せんとする攻撃中止の命令であつたという。

当時部隊は混戦の状態にあり、突入により重傷者百人、敵から離反、反転も難儀であり、連隊長以下悲愴な決意を以て敢行するも敵の抵抗は頑強で死傷が続出した。しかし軍旗を中心とする鉄石の団結は敵中突破を可能とし、十五日午前十二時、軍旗を奉じて帰還したというが、当時の生存者は三百七十八人であつたとの記録がある。

かくしてバターン半島の第一次攻略戦は全く不首尾に終わり、各部隊の損耗も甚だしかつた。しかし、その陰に、恒広大隊救援のため、筆者の湾を泳ぎ渡り伝令の任務を果たした労苦が、この体験記には切々と語られている。

そして第二次バタールの攻撃戦は、全く異なつた戦略と戦力で行なわれた。